JASE
現代性教育研究ジャーナル
2016年
No. 62
2016年5月15日（毎月15日）発行
日本性教育協会
THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 中山博邦
© JASE. 2016 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

第14回AOFS(アジア･オセアニア性科学連合)国際会議報告……1
もっと知りたい男子の性⑬……6
Dr.上村茂仁の性の悩みクリニック②……8
今月のブックガイド……9
JASEインフォメーション……10

◉第14回AOFS（アジア・オセアニア性科学連合）国際会議報告

性科学の国際会議の課題として求められる学際性・多様性

大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類 教授
AOFS（アジア・オセアニア性科学連合）諮問委員
東 優子

はじめに

2016年3月31日～4月3日、ちょうど桜が満開を迎えた韓国・釜山で、「性の権利について考え、性の健康について語ろう」（Think Sexual Rights, Talk Sexual Health）をテーマとする第14回AOFS国際会議が開催された。AOFSとはアジア・オセアニア性科学連合（Asia-Oceania Federation of Sexology）の略称で、世界5大陸に存在する性科学連合のひとつである。AOFSを含めた5つの連合が主催する国際会議は、WAS（世界性の健康学会）＝World Association for Sexual Healthが主催する世界大会が開かれない年に隔年開催される（次ページ表参照）。

会場は、朝鮮時代の王宮を再現した韓屋建物で、情

緒溢れるコモドホテルである。外観や客室の内装は歴史を感じさせるが、会議場はハイテク装備で、施設内のどこにいても無線LANがつながる。ホテルが小高い丘の上にあるため、近隣のホテルに宿泊していた杜

会場となった釜山・コモドホテル

翊寧さん（京都大学大学院）は毎日の通いで汗だくになり、高齢者からは足腰の痛みを訴える声も聞かれたが、観光にも便利で、短い滞在日数ながら釜山を満喫するには文句ないロケーションだった。

WAS 主催の国際会議に比べれば参加国は圧倒的に少なくなるが、前年のシンガポールが世界会議としては史上最低（51 か国･371 名）を記録したばかりだけに、今回の 15 か国から約 200 名という数字は、AOFS としては十分だったのではないだろうか（世界大会は多いときで 1,500 名を超える）。

参加国の内訳をみると、韓国（72 名）に次いで日本（32 名）とインドネシア（29 名）が多く、珍しいところではモンゴルやパキスタン、トルコ、ナイジェリアなどの名前もあった。

大会長はアンドロロジーの専門家

釜山は満喫したものの、学術プログラムがどうだったかと言えば、個人的には「ときめき」を感じる場面に欠ける大会だった。「セクソロジー（性科学）というよりは、セクシュアル・メディスン（性医学）」あるいは「アンドロロジー（男性学・雄性学）」の印象が強い大会で、性の専門家を標榜するには、ジェンダーや性的指向に関して不勉強な発表者も多かった。広い会場で複数のプログラムが同時進行するため、すべての口演を聞いたわけではない。私の専門領域が違えば、感想もまた違ったものになっていたかもしれない。とはいえ、全体的にダイバーシティ感にかけていたいというのは、後で紹介するアブストラクトの分析がそれを裏づけている。

今回のパク・ナムチョル大会長は、釜山国立大学付属病院の病院長で、アンドロロジー（性的機能不全、男性不妊、前立腺、および男性の老化など）を専門とする泌尿器科医である。韓国に暮らす日韓の友人たちからは「韓国の医者や看護師はとにかく偉そうに威張っている」と聞かされていたが、流暢な英語を話すパク大会長は、人好きのする笑顔が印象的な好人物だった。

AOFS 国際会議		WAS 国際会議	
①パリ（1974）、②モントリオール（1976）、③ローマ（1978）、④メキシコシティ（1979）、⑤エルサレム（1981）、⑥ワシントン DC（1983）、⑦ニューデリー（1985）、⑧ハイデルブルグ（1987）、⑨カラカス（1989） ※以上①～⑨は WAS 国際会議			
1990	①香港	1991	⑩アムステルダム
1992	②上海	1993	⑪リオデジャネイロ
1994	③ニューデリー	1995	⑫横浜
1996	④台北	1997	⑬バレンシア
1998	⑤ソウル	1999	⑭香港
2000	⑥神戸	2001	⑮パリ
2002	⑦シンガポール	2003	⑯キューバ
2004	⑧ムンバイ	2005	⑰モントリオール
2006	⑨バンコク	2007	⑱シドニー
2008	⑩北京	2009	⑲イエテボリ
2010	⑪バリ	2011	⑳グラスゴー
2012	⑫松江	2013	㉑ポルトアレグレ
2014	⑬ブリスベン	2015	㉒シンガポール
2016	⑭プサン	2017	㉓プラハ
2018	⑮チェンナイ	2019	未定

２日目の夜に催された晩餐会の VIP 席は、大会長に縁の深い重鎮（とその女性配偶者）で埋め尽くされいた。日本からは熊本悦明氏（泌尿器科医／日本臨床男性医学研究所所長）や奥山明彦氏（泌尿器科医／日本アンドロロジー学会評議員）が招待されていたが、女性は１、２名ぐらいだった。単純な仕切りミスだったのか、AOFS としては VIP であるはずのレデルマン前会長の席がそこには用意されておらず、一部参加者の怒りをかった。

性科学の国際会議に初参加だという女性は、少し驚いた様子で「一度にこんなたくさんの男性を見たのは久しぶりだわ」と感想を漏らした。これが性科学だと思われてはたまらないと思った私は、「ぜひ、来年の WAS にいらして下さい。全く違った印象を受けると思いますよ」とその場を取り繕った。

釜山大会の特徴

個人的な印象ばかり述べていてもしょうがないので、ここでデータを紹介することにしよう。以下の数字は、釜山大会の総括として、クリストファー・フォックス博士（シドニー大学・臨床性科学）が閉会式で紹介したものである。セックス・セラピストであり、自らを「オタク」と称する博士は、プログラム・ブックに掲載された113本の全アブストラクト（口演57本、特別講演37本、ポスター発表19本）に登場するキーワードを分類し、内容分析を試みたという。

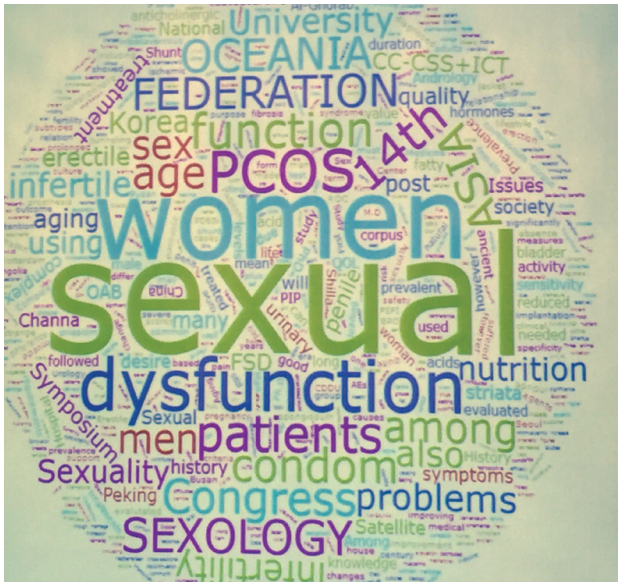
まず、全体の45%が「バイオメディカル系」、55%が「社会科学系」に分類されるという。この数字からは、私が先に述べた「セクソロジー（性科学）というよりは、セクシュアル・メディスン（性医学）」といった個人的感想が裏づけられないように見えるが、（博士が急ぎ分類した雑な方法では）「社会科学系」には臨床心理学から文化人類学まで含まれている。その意味において、「バイオメディカル系45%」というのは、今回の大会が「性科学というよりは、性医学」という印象を与えるには十分だったといえる。

また、調査・研究対象の男女比に注目すると、口演の46%が「男性」で14%が「女性」、特別講演の35%が「男性」で14%が「女性」、ポスター発表の53%が「男性」で11%が「女性」だった。もちろん、対象が「男女」である研究もあり、口演の28%、特別講演の49%、ポスター発表の21%がこれにあたる。

問題は、単に「男性」を対象とした研究が多かったというだけでなく、「女性を対象にしている研究の多くはセックスに焦点化したものであり、未だに、女性は男性の性的満足や生殖に関連して語られる傾向がある」という博士の分析結果にある。さらには、今回の大会は非規範的な性的多様性やジェンダーの多様性に関する研究に欠けており、性の健康に関してキーとなる若者の存在感がなかった、とも博士は指摘した。

「性科学が、未だに、異性愛（者）のありようをその他のあらゆる性的表現に優るものとして扱っており、性的満足よりも生殖を、女性よりも男性を優位に扱っているというのは、誠に残念なことである。ジェンダーの多様性やセクシュアルな多様性、あるいは非規範的なプラクティス（行動・実践）に対してインクルーシヴ（包摂的）であることが専門家に求められている」とフォックス博士は述べた。また、報告の最後に彼が「AOFS国際会議の未来」における課題としてあげたのは、1）社会科学とバイオメディカルのバランス（博士の夢としては、この2つが融合した性科学の実現）、2）サイレント・ボイス（声なき声）に関する公平と正義（女性のセクシュアリティ、性の権利、ジェンダーの多様性、セクシュアルな多様性などを含めていくこと）であった。

閉会式で釜山大会を総括するクリストファー・フォックス博士（シドニー大学）



フォックス博士（シドニー大学）によるキーワード分析

フォックス博士の報告にある「性科学」は、あくまでも「釜山大会で性科学として扱われたもの」であったと、私は思っている。アジア圏における性科学言説は、時代から取り残されている気がする。他の4つの連合が主催する国際会議はどんな感じなのだろうか。AOFSとその他の連合に交流らしきものはないが、AFSHR（アフリカ）、EFS（欧州にトルコ・イスラエルを含む）、FLASSES（南米にポルトガル・

特別講演「性の権利：身体の保全と自律をめぐる意見の対立」をおこなう筆者

マーガレット・レデルマン博士（オーストラリア）と内山絢子氏（元・目白大学教授）

その他のスペイン語圏を含む)、NAFSO（北米）は、それぞれに横のつながりもあるようだ。

とくに2016年にマドリッド（スペイン）で開催されるFLASSESには、メンバー国以外からも多く参加するらしく、WASの役員会議が開催されることになったほどである（招集はされたが、私のように欠席する役員はスカイプで会議参加することになる）。こうした地域別で開催される他の国際会議にも、一度参加してみたいと思っている。

AOFSの課題

AOFSは、加盟国間でも交流する機会がほとんどなく、どこで何が起こっているのかをお互いによくわかっていない。こうした問題を解消する一助として、ニュースレターを発行することになった。現在は加盟していないが、SRHR（性と生殖に関する健康と権利）に関してユニークかつ先進的な取り組みをしているフィリピンのような国にアピールするためにも、こうした活動は重要である。しかし、記事を構成するために必要な情報収集さえままならないのが現状で、紙面がオーストラリア関連の情報で占められることも多い。

この問題は、言葉（英語）の問題が大きいことと、若手の取り組みが進んでいないことが影響しているように感じている。地理的距離や経済格差は、他の連合も共有する問題だとして、AOFSは加盟国間での言語コミュニケーションの困難さが他と比べて際立っており、それが加盟国間の関係性に距離を生む原因になっているような気がしてならない。AOFS役員会議の顔ぶれをみると、各国代表者は「重鎮」が多く、年齢も高い。波多野義郎先生（日本性教育協会運営委員・東京学芸大学名誉教授）のようにレデルマンと共に構造改革をバリバリ推し進める重鎮もおられるので、年齢だけの問題ではないが、自分の専門領域以外の国内動向に関して情報を収集し、それをメールで報告し合うといったことを、彼らほどの社会的地位にある人たちに期待するのは無理なのだろうと想像する。

コミュニケーション不足は、思わぬ事件も引き起こす。釜山でも驚かされる出来事があった。2日目に開催された役員会議で次々回（2020年）の開催地について検討しようとしていた矢先、構成メンバーの一人から「午前中のセッションで、中国・性科学会の会長から参加者全員に、2020年は中国に決まったと発表がありました」との発言があった。候補になるために必要な書類は提出されておらず、これは会長にとっても「寝耳に水」だった。さらに驚くべきことに、その役員会議には肝心の中国代表者の姿がなかったのである（他の重要な会議に出席中とのこと）。こんなことが許されるのかと思うが、それでも、結論から言えば2020年の開催地は（中国が辞退しない限り）このまま中国で決定する。

このわけのわからなさに辛抱づよくつきあってきたのが、釜山で任期満了を迎えた前AOFS会長のマーガレット・レデルマンである。彼女はシドニーの開業医／セックス・セラピストで、オーストラリア性科学学会の会長職やWASシドニー大会の大会長も経験している。レデルマンは、任期中に素晴らしいリーダーシップを発揮し、ホームページのリニューアルからニ

AOFS 役員と談笑するパク大会長

閉会式を終えて、（前列右から）第 11回（バリ）大会長、第14回（釜山）大会長、第 15回（チェンナイ）大会長、第 13回（ブリスベン）大会長

ュースレターの発行、さらには内規の見直しに至るまで、AOFS の構造改革を着々と進めてきた。

AOFS の前身は、香港で発足した「アジア性科学連合」で、2004 年にオーストラリアが加わったことにより、「アジア・オセアニア」に名称変更したが、性科学の地盤が盤石なオーストラリアとその他加盟国では、様々な点で違いが大きい。そもそも、性科学で学位を取得することのできる教育機関を構えているのはこの国だけで、それもシドニー大学とカーティン大学の２校が、よきライバルとして切磋琢磨している。

カーティン大学で性科学専攻を立ち上げたローズマリー・コーツ博士は、言わずと知れた WAS 前会長である。これだけ存在感が大きいながら、釜山大会に参加したオーストラリア勢はわずかに４名で、コーツ博士も欠席した。このままだと、もしかしたら、FLASSES がラテン・アメリカ諸国だけでなく、スペイン語圏全体を取りまとめる組織に変わったように、オーストラリアのように言語も文化も異なる国は別の連合に移籍する日が来るのかもしれないと、ふと思った。

地域性を活かした活動展開への期待

釜山の役員会議では、今後のさらなる展開として、学会誌の発行と研修制度の立ち上げが提案された。しかし、「これだけ専門家が揃っているのだから、すぐにでも実現可能だ」と盛り上がる議論を見守りながら、私の気持ちはいささか冷めていた。

教育・研修の機会を必要とする地域が多いということは認識しているのだが、研修の内容が結局は性医学に偏るのではないかと想像するからである。学会誌にしても、今回の発表を聞く限りにおいて、学際性と専門性の質を担保するのはなかなか難しそうであり、既存の学術誌で採用されなかった論文の受け皿になって終わるのではないかという懸念がある。

そうはいうものの、欧米由来の言説が幅を利かせる中で、アジア・オセアニア地域固有の現象や、豊富な経験と知識を学ぶ機会を増やすことには賛成である。個人的には、先住民族の知見と性科学の融合といったテーマにも関心があるので、すでにある性科学専門誌にはない特色を活かした学会誌になるよう期待したい。

2017 年は WAS 国際会議プラハ大会

このような AOFS 国際会議報告を書いてしまうと、2 年後のチェンナイ（インド）大会に参加しようという人を減らしてしまうような気もするが、大会の特徴は毎回変わる。次回会長は、WAS の役員を務めるナラヤナ・レディ博士である。氏は、インドにおける性医学のパイオニアで、「性教育」と「親・家族支援」を中心に活動してきた人物である。インドは、東アジアとはまた異なる、豊かな性文化をもつ。東南アジアや中央アジアからの参加者が増えることも期待できる。

また、今回の報告を読んで、性科学なんてそんなものかと思われた人には、前述の私の発言「ぜひ、来年の WAS にいらして下さい。全く違った印象を受けると思いますよ」を繰り返したい。

次回（2017 年）は、東欧・プラハ（チェコ）で開催される。AOFS ジャパン事務局では、次世代育成を目的として、国際会議参加助成を行っているので、時期がくれば本紙『現代性教育研究ジャーナル』で案内する予定である。